

論文

全国の大学演習林における「山の神」祭行事の現状*1

西川希一*2・奥山洋一郎*2・枚田邦宏*2

西川希一・奥山洋一郎・枚田邦宏：全国の大学演習林における「山の神」祭行事の現状 九州森林研究 74：9－12, 2021 本研究の目的は、全国に設置されており、管理体制がある程度均質な大学演習林を対象に調査を行い、現在取り行われている全国の山の神のための神事、祭事、行事など（以下、祭行事）の内容の地域的な特徴について検証することである。このために、全国大学演習林協会に加入している27大学、112演習林を対象にアンケート調査を行い、その結果を地域ごとに区別して分析したところ、①19大学、29演習林に祭行事がある、②祭行事の開催日は地域ごとで特徴がある、③16演習林で山のもの・海のを併せて供えている、④28の演習林で安全祈願の対象である、⑤山の神に明瞭な具体像はないことが明らかになった。

キーワード：林業、山の神、伝統文化、大学演習林

I. 背景・目的

これまで民俗学の観点からは、山の神に関する諸問題についてさまざまな研究・考察がなされてきた（ナウマン、1994；金田、1998；小野、1992）。これらの研究はかつて山村で暮らしてきた人々の文化・風俗を明らかにしてきた。しかし、山村から人口が都市部へと流動し木材供給の担い手が林業経営体へと移行した現代においては、祭事の担い手も変化しており、それに伴って様式の変化をとらえるための観点が必要となる。林業経営体の祭行事について研究した先行事例として、柳田による近畿地方、中部地方の森林組合を対象にした研究があるが（柳田ほか、2016 a；2016 b）、全国の地域を比較して考察はされていない。

本研究では、全国に設置されており、管理体制がある程度均質な大学演習林を対象に調査を行い、現在取り行われている全国の「山の神」祭行事の地域的な特徴について検証することを目的とする。

II. 調査方法

調査は、全国大学演習林協会に加入している27大学112演習林（2020年11月時点）を対象とした。大学演習林での祭行事の内容、山の神の特徴を明らかにするための質問紙調査（表-1）を実施した。回答は、各演習林よりメール・FAXもしくは電話インタビューで得た。

調査結果より、祭行事の内容とその地域性を明らかにするため、演習林の所在を全国大学演習林協会が定める4つの区域（北・東・西・南ブロック）に分けて考察した。各ブロックに含まれる都道府県は以下のとおりである。北ブロックは北海道、岩手、山形、宮城、新潟、栃木である。東ブロックは、東京、千葉、神奈川、群馬、埼玉、茨城、長野、山梨、静岡である。西ブロックは、愛知、岐阜、三重、京都、和歌山、岡山、鳥取、島根、山口であ

る。南ブロックは、愛媛、高知、福岡、宮崎、鹿児島、沖縄である。

また、実地調査として、2020年10月16日に鹿児島大学高隈演習林で開催された祭行事（山神祭 [サンジンサイ]）について調査を行い、地域で行われている山の神との関係性を考察した。

表-1. アンケートによる聞き取り質問項目

1.	祭行事の概要
1.1	有無
1.2	呼称
1.3	開催時期
1.4	始めた時期
2.	祭行事の内容
2.1	職務
2.2	供え物
2.3	規模
2.4	禁忌
2.5	目的
2.6	ご神体
3.	山の神の特徴
3.1	神の名前
3.2	性別
3.3	遣い

III. 調査結果

1. 祭行事の概要

1.1 祭行事の有無

祭行事の有無について、25大学108演習林から回答を得た（質問回答率96%）。108演習林のうち19大学27演習林で祭行事があった。2大学2演習林で、現在は行っていないが過去に行われていたという回答を得た。各ブロックでの回答数は、北ブロック

*1 Nishikawa, K., Okuyama, Y., and Hirata, K. : Current status of "Yama-no-Kami" rituals of university forests in Japan

*2 鹿児島大学農学部 Fac. Agric., Kagoshima Univ., Kagoshima, 890-0065, Japan

で10演習林、東ブロックで6演習林、西ブロックで6演習林、南ブロックで7演習林であった。

回答のあった108演習林うち祭事が行われていない演習林が多数であったが、近年の人員削減により職員が常駐しない演習林が増加していることや、調査対象に大学構内の苗畑等の山仕事とは無関係な施設が含まれたためであった。

1. 2 祭行事の呼称

祭行事の呼称について、祭行事を実施した経験のある29演習林すべてから回答を得た（複数回答）（設問回答率100%）。呼称はさまざまあるが、注釈に従い山神祭、山の神、安全祈願祭、山入り、山の講、その他の6グループに分類すると表-2のようになった。

表-2. 祭行事の呼称

	北ブロック	東ブロック	西ブロック	南ブロック
山神祭※1	8	2	3	2
山の神※2	0	3	4	3
安全祈願祭	0	3	1	1
山入り※3	2	0	1	0
山の講	0	1	1	0
その他	3	0	2	2

※1：「山神祭」の語が含まれる。読みに揺れアリ。

※2：「山の神」の語が含まれる。読みに揺れアリ。

※3：「山入り」「入山」の語が含まれる。

山神祭の呼称は全国の演習林に分布しており、山の神、安全祈願祭は北ブロック以外の地域で見られた。西ブロックは他のブロックに比べ、様々な呼称で呼ばれていることが分かった。

1. 3 開催時期

祭行事の開催時期については、29演習林すべてから回答を得た（複数回答）（設問回答率100%）。

表-3. 開催月

	北ブロック	東ブロック	西ブロック	南ブロック	計
1月	1	2	0	2	5
2月	1	1	0	0	2
3月	0	0	0	0	0
4月	1	0	1	0	2
5月	1	2	1	2	6
6月	2	0	0	1	3
7月	0	0	0	0	0
8月	0	1	0	0	1
9月	1	0	0	3	4
10月	0	2	1	2	5
11月	0	1	2	0	3
12月	4	0	1	1	6
10, 11月	1	1	1	0	3

開催月の結果については表-3のとおりであった。演習林全体で開催月に偏りはなく、5月、12月が最も多かった。旧暦9月は10月に分類した。5演習林では年に2回、3演習林では年に3回行うとの回答を得た。年2回行う演習林は4月、5月と10月の組み合わせが多く（3演習林）、年に3回行う演習林は1月、5月または6月、9月の組み合わせであった。

表-4. 開催日

	北ブロック	東ブロック	西ブロック	南ブロック	計
5日	0	0	0	1	1
6日	1	0	0	0	1
7日	0	2	3	0	5
9日	0	0	0	4	4
10日	1	0	0	0	1
12日	7	0	0	1	8
15日	0	0	1	0	1
16日	0	0	0	3	3
17日	0	2	0	0	2
定まっていない	1	4	2	0	7

開催日については表-4のとおりであった。開催日について、21演習林で回答を得た。そのうち実施日まで明確に定められているのは14演習林であった。開催日は「12日」が最も多く（8演習林）、次いで「7日」が多かった（5演習林）。この回答には地域差があり、北ブロックでは「12日」（7演習林）、西ブロックでは「7日」（3演習林）に行う場合が多かった。東ブロックでは「7日」、「17日」（それぞれ2演習林）に行い、南ブロックでは「9日」（4演習林）、「16日」（3演習林）に行う場合が多かった。また、何らかの事情で開催日通りに行うことができない場合には、必ずそれ以前に行うという回答が多く得られた。

1. 4 始めた時期

祭行事の始めた時期について、29演習林すべてから回答を得た（設問回答率100%）。経緯は不明という回答を11演習林、明確な時期の回答を7演習林から得た（大正5年5月6日、昭和24年×2、昭和26年、昭和27年12月12日、昭和29年5月、昭和37年）。

他11演習林は「おおよその目安はつくものの断言はできない」といった回答であった。始めた時期に地域ごとの特徴を見ることはできなかった。

2. 祭行事の内容

2. 1 当日の職務

祭行事当日の職務について、29演習林すべてから回答を得た（設問回答率100%）。「当日は山仕事をしない（事務仕事は行う）」、「祭の準備のみ」という回答を11演習林、「通常通り作業を行う」という回答を12演習林から得た。また、「安全教育を実施する」という回答が5演習林、「現在は通常業務を行っているため山に入ることもあるが、刃物を使う作業を避ける風潮が残っている」という回答が1演習林でみられた。

2. 2 供え物

祭行事の際の供え物について、29演習林すべてから回答を得た（設問回答率100%）。供え物をしない演習林はなく、すべての演習林で供え物が存在した。しかし、年に複数回祭行事を行う演習林で、「一回を除いて供え物を準備しない」という回答が1件あった。御神酒はすべての演習林で供えられており、海のもの（魚類）と山のもの（野菜類）をあわせて供える所が16演習林あった。内訳は、北ブロックで5演習林、東ブロックで2演習林、西ブロックで4演習林、南ブロックで5演習林であった。全国で「海のもの、山のもの」を供えていることが分かるが、回答演習

林数と「海のもの、山のもの」を供える演習林数を割合で見ると西ブロック、南ブロックで「海のもの、山のもの」を供えている割合が高いことがわかった。

「祭行事の後に塩や御神酒、水を祠などの周りに撒く」という回答が4演習林でみられた。

2.3 規模

祭行事の規模について、29演習林すべてから回答を得た（設問回答率100%）。50人ほどで行う演習林から、技術職員のみで済ませる演習林まで、規模は様々であった。9演習林では「宮司・神主を招いて祭行事を行う」という回答を得た。また、演習林が借地である大学では、土地を所有する関係者が参加するという回答があった。

2.4 禁忌

祭行事の禁忌について、29演習林のうち28演習林から回答を得た（設問回答率97%）。19演習林で「特になし」という回答を得た。そのうち2演習林で「過去は女人禁制であった」という回答を得た。3演習林で「身内に不幸があった者、忌が明けていない者は参加しない」という回答、2演習林で「伐採作業を行ってはならない」という回答を得た。また、3演習林で女性に関する回答があり、うち1演習林では「女性技術員は例外としているが、他の女性は参加しない」という回答であった。「六曜についての禁忌がある」という回答が1演習林で見られた。

2.5 目的

祭事を行う目的について、29演習林のうち28演習林から回答を得た（複数回答）（設問回答率97%）。27演習林で「安全祈願を目的とする」という回答を得た。残りの1演習林は、「伝統、また大学関係者が演習林へ来訪する機会の創出」という回答であった。5演習林では「安全祈願に加えて安全に業務を行えたことに対する感謝」、「山の恵みに対する感謝のお礼のために行う」という回答を得た。

2.6 ご神体

ご神体について、29演習林すべてから回答を得た（複数回答）（設問回答率100%）。3演習林で不明・ナシという回答を得た。7演習林で「鳥居がある」という回答、7演習林で「祠がある」という回答を得た。5演習林で「天然石・字の彫られた石」という回答、6演習林で「ご神木がある」という回答を得た。ご神木の樹種は「カツラ」が2件、「エゾヤマザクラ」、「イチイ」、「コウヤマキ」、「トドマツ」が1件ずつであった。3演習林で「御札である」という回答を得た。その内、2演習林は「大山祇神社の御札」で1演習林は「石王神社の御札」であった。

3. 山の神の特徴

3.1 山の神の名前

山の神の名前について、29演習林すべてから回答を得た（設問回答率100%）。20の演習林では「不明・分からない」との回答を得た。内訳は、北ブロックで6演習林、東ブロックで5演習林、西ブロックで3演習林、南ブロックで6演習林であった。3演習林で「山の神」、「山神」という回答、4演習林で「大山祇神」という回答を得た。「八幡谷神社」、「馬頭観喜菩薩（ママ）」という回答が1件ずつあった。全国に共通して、特定の名前は知られていないことが多いことが分かった。

3.2 性別

山の神の性別について、29演習林すべてから回答を得た（設問回答率100%）。8演習林で「ナシ・不明である」という回答を得た。内訳は、北ブロックで3演習林、東ブロックで1演習林、西ブロックで3演習林、南ブロックで1演習林であった。17演習林で「女性格である」という回答を得られた。内訳は、北ブロックで6演習林、東ブロックで4演習林、西ブロックで2演習林、南ブロックで5演習林であった。そのうち5演習林では「伝聞では女性とされているため女性格ではないか」と回答し、1演習林では「地域では女性格らしいが演習林の山の神では性別は認識されていない」と回答した。全国で、山の神は女性格であるというイメージが一般的であることが分かる結果となった。

3演習林で「男性格である」という回答を得られた。内訳は、北・東・西ブロックで1演習林ずつであった。これらの演習林はすべて山の神の名前として「大山祇」と回答をしていた。1演習林で「男性とも女性ともいわれている」という回答が得られた。また、神の名前では大山祇（男神）と回答しながら、性別は女性格であるとする回答が1演習林でみられた。

3.3 遣い

遣いについて、29演習林すべてから回答を得た（設問回答率100%）。ここでの「遣い」とは、神が人間に対して何か啓示や警告を与える際に差し向ける動物のことを指す。すべての演習林で「いない・分からない」という回答を得た。

IV. 鹿児島大学高隈演習林での事例

1. 高隈演習林について

高隈演習林は鹿児島市対岸、大隅半島の北部、桜島東方に位置する南北に長く伸びた一団地である。面積は3,066 haで、標高100 m～885 mに位置し、標高500 mを越えるところが半分を占め、急傾斜地も多く随所に滝も見られる（鹿児島大学農学部附属演習林）。本演習林は明治42年に旧官有林が移管されたものであり、全国の演習林でも屈指の規模を持ち、戦後の一時期までは林内集落も形成されていた歴史を持つ（奥山、2019）。

2. 調査結果

呼称は「山神祭（サンジンサイ）」であり、開催日は旧暦9月16日、またはそれ以前の都合の良い日であった。始めた時期は分からないとのことだったが、回答職員が勤め始めた35年前にはすでに行われていた。当日は基本的に山に入る作業はせず、会議などの事務作業を行った。供え物には海のもとと山のものがあり、日本酒ではなく焼酎が用いられていた（写真-1）。参加者は20名程度で、演習林職員・技術職員に加え、鹿児島大学の農学部関係者も数名見られた。禁忌などは特に存在しておらず、開催目的は安全祈願であった。ご神体は石の祠内に設置してある石碑であり、「椎木山神本〇」（〇部分は読めず）の文字が刻まれていた（写真-2）。山の神の名前などは特になく、性別は女性格であった。

準備に必要な榊や竹は演習林内のものを利用した。以前は地元住民から譲ってもらった稲でしめ縄も自作されていたが、コンバインなどでの収穫が増えたことによりしめ縄に使える長さの稲を用意することができなくなったため、数年前より化学繊維で

表-5. 山神祭 式次第

1. 修祓	6. 清め払いの儀
2. 降神の儀	7. 玉串奉奠
3. 斎主一拝	8. 撤饌
4. 献饌	9. 斎主一拝
5. 祝詞奏上	10. 昇神の儀



写真-1. 祭壇と供え物



写真-2. 祠



写真-3. 竹と櫛

作られたしめ縄に変更されていた。

祭壇を設置する際に、祠の四隅に竹と櫛を対にして差した(写真-3)。通常は竹のみを用い、この演習林の特徴と言える。

祭行事には地元の神社から宮司を招き、表-5の式次第に則って山神祭が行われた。筆者は祠を神籬(ひもろぎ)に見立てた様式のものかと思ったが、宮司によると、「祠があるのに(神がそこにいるのに)、何故降神を行う様式を用いているのか分からない」とのことだった。神籬とは、神祭りをするにあたり、神霊を招くための憑坐、依代のことである。この点から、本演習林での祭行事が地域で一般に行われている様式と一部異なっている可能性が示唆された。

V. まとめ

大学演習林に対する全国調査の結果として、19大学27演習林で祭行事が行われていた。回答のあった108演習林うち祭行事が行われていない演習林が多数であったが、近年の人員削減により

職員が常駐しない演習林が増加していることや、調査対象に大学構内の苗畑等の山仕事とは無関係な施設が含まれたためである。

祭行事には地域性があり、特に祭行事を行う日付について大きな差異がみられた。北ブロックでは「12日」に開催する場合、西ブロックでは「7日」に行う場合が多かった。先行研究でも、本州北部の広域で「山の神」は「12日」とされており(ナウマン, 1994)、地域に沿ったものであるといえる。他のブロックでも、同地域、または近隣地域の特徴と一致した。これらの事実から、演習林の「山の神」の多くは地域の祭事から派生したと考えることができる。

祭行事で、「山のもの」「海のもの」を供える演習林が多数であった。また、大学演習林における山の神は、名前や姿など具体的なイメージを持たれていない場合が多いことが明らかになった。さらに、山の神を男神としながら性別は女性格と伝えられた事例があった。これはどちらも日本全国で知られる山の神の形態であるが、記紀神話における「山の神」と、民間で信仰されてきた「山の神」が混同されている事例であると考えられる。

鹿児島大学高隈演習林の調査では、儀式の信仰で地域との差異がみられた。また、コンバインの使用によってしめ縄に使える長さの稲を用意することができなくなり、化学繊維に置き換えられたように、農作業など、一見関係のない場所での技術革新が祭行事に様式に影響を与えていることも判明した。先述のように、演習林における「山神祭」は地域の祭行事から派生したと考えられるが、一方で、祭行事の一部が独自の様式で実施されていることも判明した。この点は、林業経営体における祭事が民俗学で捉えられてきた山の神とは違う形態で実施されている可能性を示すものである。

以上を踏まえ、今後の課題として演習林以外の林業経営体についての調査を行い、林業経営体の山の神の様式を明らかにしていくとともに、かつて地域で行われていた山の神との関係を明らかにする必要がある。

引用文献

鹿児島大学農学部附属演習林.

URL : <https://ace1.agri.kagoshima-u.ac.jp/~takakuma/>
(2020年11月9日利用)

金田久璋(1998) 森の神々と民俗, 301 pp, 白水社, 東京
ネリー ナウマン 著, 野村伸一・檜枝陽一郎 訳(1994) 山の神, 464 pp, 言叢社, 東京

小野重朗(1992) 南日本の民俗文化Ⅱ 神々と信仰, 452 pp, 第一書房, 東京

柳田邦玲雄ほか(2016 a) 日本森林学会大会学術講演集 127 : 113
柳田邦玲雄ほか(2016 b) 中部森林研究 64 : 73 - 76

奥山洋一郎・森本拓也(2019) 国立歴史民俗博物館研究報告
215 : 151 - 169

(2020年11月10日受付; 2021年1月8日受理)